

これが本物の潮ラーメン！～個室に通された極上の体験～(後編)

女：紗綾 男：徹也

この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

彼女はシャワーのお湯を優しく当てながら、俺の胸板や腹筋を指先でなぞった。

「逞しいお体されてますね」

柔らかな声で囁く。

「ありがとうございます」

少し照れ臭くて、視線を逸らしながら答えた。

「アソコも……とてまご立派で」

彼女は微笑みながら、シャワーヘッドを下に移動させ、硬く張りつめたペニスに温かいお湯を直接当ててくる。

「どうも……」

緊張で言葉が詰まる。

相手があまりにも美しすぎるからだ。普通の風俗ならただの流れ作業なのに、今は一言一言が胸に響く。

「石鹸、使わせていただきますね」

彼女はボディソープをスポンジにたっぷりと取り、驚くほどの量の泡を立てた。

ふわりと漂う香りは、上品で甘く、俺が普段使う固形石鹸とは比べものにならない高級なものだろう。

まず彼女は自分の上半身に泡を塗り広げ、滑らかな肌を白く覆っていく。

「では、お背中失礼しますね」

そう言って、後ろからぴたりと密着してきた。

泡が潤滑油となり、彼女の柔らかな体が俺の背中に滑る。

特に、ふくよかな胸の感触——そして、硬く尖った乳首が背中を這うたび、脳髄に電流が走った。

彼女は胸を主に使い、背中から腰、尻のラインへとゆっくりと体をずらしながら洗っていく。

「お尻の穴、失礼しますね」

小さな声で囁き、指先で優しく、しかし確実にそこを清めていく。

さすがに胸では届かない部分だ。

それでも彼女は恥ずかしがる様子もなく、丁寧に、隅々まで洗ってくれた。

——もしかして、後でここも舌で……？

そんな期待が、頭の片隅で蠢く。

後ろ側の洗体が終わると、彼女は静かに言った。

「お客様、こちらを向いていただけますか？」

俺がゆっくり振り返ると――

目と目が、真正面で合った。

息が止まるほどの美貌。

普通なら目を背けてしまうか、見とれてしまうかの二択しかない。

他の店なら「早く次に進んでくれ」と思う洗体サービスが、

彼女の手にかかると、至福の時間に変わっていた。

正面に向き直ると、彼女は再び泡を補充し、胸から腹、そして下半身へと丁寧に洗っていく。

股間では、ペニスを優しく握り、ゆっくりと上下に滑らせながら洗い、
睾丸を両手で包み込むように揉むように清めた。

その刺激だけで、正直もう限界に近かった。

歯を食いしばって耐え、なんとか射精を堪える。

ようやく全身の洗体が終わり、俺は深い息を吐いた。

すると、彼女が少し恥ずかしそうに、しかし自然に微笑みながら言った。

「お客様……私の体も、洗っていただけないでしょうか？」

「は、はい……！」

おそらくこの店の仕様だろう。

嬢が自分で洗うパターンと、客に洗わせるパターンがある中、ここは後者だ。

この極上の体を、泡まみれにして触れる――

それだけで、すでに興奮が腹の底から沸き上がっていた。

「わかりました」

俺は「体を洗う」という名目で、遠慮なく彼女の全身を弄り回した。

柔らかな乳房を掌で包み、指先で頂を軽く弾く。

引き締まったウエストから、丸みを帯びた尻の曲線へ。

背中 of 滑らかなライン、太ももの内側、そして秘部――

どこを触れても、適度な弾力と温もりがあって、抱きしめたときの心地よさが自然と想像できた。

彼女は俺が性的な部分に集中しているのを察しているのか、
脇や腕、足の甲などは自分で素早く泡を立てて洗い流していた。

やがて、二人とも泡まみれになった。

「お客様、お願いがあるのですが……」

突然、彼女が少し恥ずかしそうに切り出した。

「ん？」

首を傾げると、彼女は小さく息を吐いて、

「私のおまんこ……もう一度、洗っていただけませんか？」

さっきも触ったはずだが――と思いながらも、拒む理由などあるはずがない。

「いいですよ」

「ありがとうございます」

彼女は丁寧に会釈をし、まるでそれが当然の礼儀であるかのように微笑んだ。

むしろ、こっちがお願いしたいくらいだ。

「では、そこの椅子に座って、腕を前に出していただけますか？」

「こう？」

俺は洗い場に置かれた椅子に腰掛け、両腕を水平に伸ばした。

「はい、完璧です。失礼いたします」

俺は腕を平行に伸ばした。

「では、失礼します」

彼女は俺の右腕にまたがるように近づき、ゆっくりと腰を下ろした。

温かく、ぬるりとした秘部が腕に直接触れる。

時折、小さな突起が肌を擦り、ぞくりとした快感が走った。

「申し訳ございません。ここはやはり入念に洗わないと、印象が悪くなってしまいますから……。

さっき、潮を吹いてましたので」

彼女は頬をわずかに赤らめながら、照れくさそうに言った。

その表情があまりに愛らしくて、つい見とれてしまう。

「ははっ、そうですね」

俺は思わず笑い、さっきの光景を鮮明に思い出した。

店主の指が数秒で彼女を絶頂に導き、勢いよく飛び散る潮。

あれは並の技術ではない。

「凄いですよね。あんなに簡単に潮吹きできるなんて」

緊張が少し解けてきたのか、自然と言葉が出てきた。

「あれもサービスのうちなんですよ。

あれを見るためだけに潮ラーメンを注文されるお客様も、実は結構いらっしゃるんです」

彼女はそう答えながら、ゆっくりと腰を前後に動かし続ける。

ぬめりと温もりが腕全体に伝わってくる。

「お客様は……楽しんでいただけましたか？」

正直、パネル越しとはいえ、美女が下半身を露わにして潮を吹く姿は、

潮フェチにとっては最高の前菜だった。

奥から漏れる喘ぎ声が、店内の空気をさらに熱くしていた。

「もちろん。最高でした」

そう答えると、彼女は優しく目を細めて、

「ありがとうございます」

と囁いた。

本当にお礼を言いたいのはこっちの方だ。

あの絶景は、どんなストリップ劇場でもお目にかかれない。

「そろそろ大丈夫そうですね。泡を流しましょうか」

彼女は名残惜しように腰を上げ、腕から秘部を離した。

その瞬間、どこか物足りなさが胸に残った。

彼女はまず自分の体から泡を流し始め、密かに股間の泡を指で丁寧に洗い落とす仕草が、またたまらなく色っぽい。

次に俺の番。